

第二室

「思ひ出の地圖」

川と人々のくらし

歴史、といつても むずかしいお勉強ではありません。

人々が どのように 川とつきあい くらしてきたのか、

「へえ、大昔の人は そんなことまでやつたのか」とおどろくことがあるわ  
「あばれ川のやつ、なんてひどいことを……」とおもうこともあるでしよう。

卷之三

川となかよくするためにはいろいろな努力をつみかさねてきました。

読みすすむにつれて、昔もいまも

わたしたちのくらしにとつて 川は大切なものなのだ、というおもいがわいてくることでしょう。

年 月

紀元前																紀元後				
1800 1800 1700				1600 1500 1400 1300 1200 1100 1000 900 800 700 600 500 400 300 200 100 1												年				
29	18	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	年
現 代	近 代	江 戸 時 代	室 町 時 代	鎌 倉 時 代	平 安 時 代	奈 良 時 代	飛 鳥 時 代	古 墳 時 代	弥 生 時 代	縄 文 時 代	水 争 い	あ は れ 川 を 守 め た 武 田 信 玄	水 を た め て 上 手 に 利 用 し た 私 市 大 師 （主 事） と 河 原 池	川 に い ど み 水 を か め る が は じ ま つた	お そ ろ い 水 を か め た 豊 臣 の む ら	人 た の く じ を 掌 て 作 っ た	大 昔 か ら 人々 は 川 の 辺 に 住 ん だ	おもな 時代区分	古 代 中 世 近 代 現 代	
● 信濃川の大河内守水 ● 大ダムと不運と人々 ● 飢渴と氷水害に、うちのめされた人々 ● からだ船の悲劇 ● 水の力で壊れた最初の電車 ● 運河開拓と川のつなげ ● 自然も人もすこぶる川づくし	● 利根川の流れを束ねた実業家と豪商一族 ● 藤沢・富士山と吉田川 ● 洪水から身を守る箱中の人々 ● 且田代用水 ● 木曽三川に水をかけた豪農・豪士の悲劇（宝暦治水） ● 稲荷平野と阿木 ● 日本の近代化とお隸い外国人 ● からだ船の悲劇 ● 水の力で壊れた最初の電車 ● 運河開拓と川のつなげ ● 自然も人もすこぶる川づくし	● あはれ川を守めた武田信玄 ● 水をためて上手に利用した私市大師（主事）と河原池	● 川にいどみ水をかめる遊びが始じました ● おぞろい河水に泡まれた豊臣のむら ● 人々のくじを掌て作った操作	● 大昔から人々は川の近くに住んだ	川と人々の暮らし															

## 大昔から人々は、川の近くに住んだ

「あつ、いのししが、水をのみにきているぞ」「しつ、しずかに。いまのうちにしとめるんだ」えものをねらっているのは、縄文時代の人たちです。

人も動物も、生き物はみな、水がなくては生きてはいけません。

縄文時代の人々は、木の実や魚貝をとったり、いのししなど、けものを狩りしたり、自然にあるものを食料にしていましたから、食べるものが少なくなると、たびたび住むところを替えていたようです。しかも、かならず、川や泉の近くに住みました。

木がおいしげる山のなかでは、かならずどこかで、水がわきでています。

山の森は、雨水をしっかりと地中にたくわえます。その水が、土のなかを長い時間をかけてゆっくりとおりぬけ、少しずつ、あちらこちらからわきだして、小さな流れとなり、谷川へあつまっています。しかも、かならず、川や泉の近くに住みました。

お天気の日でも、谷川の水が元気よく流れているのは、このためです。山からわきだした水は、きれいで、しかもとてもおいしいのです。人も動物も、この水がわきだしているところや流れているところをよく知っていました。

川は、のみ水だけでなく、川の道にもなりました。どんなに山おくへ入っても、谷川にそつて歩けば、まよわずにすみました。丸木舟で海にてるための道にもなりました。

このように、大昔から、川は人々の暮らしにとつて、なくてはならないものでした。

自然のなすがままの山に住み、川とともにくらし

た縄文時代は、いまから、およそ一万年前にはじまり、八千年ほどもつづきました。



### 人々の暮らしを変えた稻作

「これが、米というものか」  
「こんなにおいしいものが、自分たちの力でつくれるなんて、ほんとうだろうか」「よおし、われらも米づくりをはじめよう」大陸から海を渡ってきた人たちによつて、米づくりの技術が伝わったのは、いまから、およそ二千三百年前といわれています。縄文時代の後期にあたります。

それまで、食料を自然にあるものだけにたよっていた人々が、自分たちの手で、食べ物をつくることをおぼえたのです。

「もっとたくさんお米をつくりたい」「それには、もっと広い土地がいる」「では、山をおり、平野にでよう、広い土地がある」  
「土地があつても、水がなければ、田はつくれないぞ」  
「そのとおりだ。平野には、いくすじもの川が流れている。水をひきやすい川をさがし、田をつくろう」  
人々は、小さな川や水をためやすい湿地をさがし、「むら」をつくりました。  
力をあわせて、平野に新天地をひらきはじめたのです。こうして、稻作を中心とした弥生時代がはじまりました。  
おかげで食料は増え、くらしは安定しました。人口も増えました。「むら」には、人々をさしつする頭もあらわれました。  
力のつよい「むら」が、力のよわい「むら」をしたがえて、やがて「くに」が生まれました。「くに」を治める豪族がより力をつけ、ゆたかになるには、川と同じようにつき合い、水田を増やすことが、なによりだいじなことでした。





本格的に新作がはじまつた弥生時代（23世紀）

### 登呂のむら

静岡市には登呂遺跡があります。いまから、およそ千八百年前、弥生時代の人々の住居や水田のあとが、発掘されたところです。湿地を利用してつくられた水田は、五十あまりにくぎられ、あぜ道は何万枚もの木の板で土どめされていたり、川から水をひいてくる用水路が掘られていました。

「むら」には、六十名から七十名の人たちが住んでいたと考えられています。木でつくられたくわやすきなどの農具をつかい、「むら」の人々は、いっしょにけんめいはたらきました。とれたお米は、ゆかの高い倉庫をつくってたくわえました。

「これで、冬がきても、食べるものはだいじょうぶだ。われわれに、土地と水があるかぎり、もう、飢えにくるしむことなくなる」人々は、そう考へ、安心したことでしょう。

登呂のむらのそばを流れる川は、水田にも、くらしにも、じゅうぶんな水を運んでくれていました。このありがたい川は、いまの、安倍川のことです。

## おそろしい洪水にのまれた豊呂のむら

「たいへんだあ、水があふれてきたぞお」「ああ、家が流されてゆく」「われらの米倉も、もう、おしまいじゃあ」「ぐずくずするなつ早くにげろつ」人々の、あわただしい叫び声がします。

ふだんはおだやかな川も、いつたん洪水となると、おそろしいあばれ川に変身します。

昔から川は、何年に一度、何十年に一度かは大洪水をおこし、水とともに多くの土を、山から運びだしてきます。その土がつもりつもつて、平野ができたのです（沖積平野）といいます。

この平野の土は、栄養分があつて、お米づくりには、とてもむいていました。

豊田のむらも、安倍川が支流と合流して海にでるあたりにあって、土にも水の便にも、めぐまれたところでした。

「むら」では、何年か、何十年かは、平和でゆたかなくらしが、つづいていたことでしょう。しかし、そこは洪水の氾濫が、おこりやすい場所でもあったのです。

安倍川の流域に、めったにない大雨がふりついだのかもしれません。たぶん人々には考えられないような、大洪水がおこり、あれくるう水が、海のように広がって、おそいかかってきたのでしよう。

豊田のむらは、ひとたまりもなくのみこまれ、土砂にうめつくされたのでした。



## 川にいどみ、水を治める戦いがはじまった

「川ほど　ありがたいものはない。われらが水をのめるのも、稻をつくるのも、川あればこそじや。」

人々は川に感謝しました。

「しかし、川ほど　こわいものもない。洪水をおこしたときの川は、水田も家もおし流し、われらの命まで、うばおうとするではないか」人々にとつて、川は　ありがたいだけではなく、はんたいに　おぞろしいもの　でもあつたのです。

「川のめぐみをうけながら、なおかつ、あばれ川に　いためつけられずにくらす方法は、ないものだらうか」

と、古墳時代の人々は考えはじめました。

古墳時代には、それぞれの「くに」をおさめる豪族の上に大和朝廷の大王がいました。

その、大きな力をもつ大王の指導によつて、これまで、洪水がおこれは　にげることしか考えなかつた人々が、はじめて、あばれ川と戦うために、大地に取り組みはじめたのです。

古事記や日本書紀には、川や大地に取り組んだ人々のようすが記録されています。



そのなかに、茨田の堤と難波の堀江があります。いまから、千六百年ほど前の大坂平野は、大きな入江（河内湖）が広がる荒れ地でした。

ときの大王（仁徳天皇）は

「土地は広いが、田は少ない。川の水はみだれて流れ、水の出口もせまい。これでは、人家も田も少しの雨で水びたしになつてしまふ。川を整え、安全な土地にしよう」

と考えて、川の大工事に取り組みました。

これまでどちらがうのは、大きな川に取り組んだことでした。淀川や大和川、それに河内湖が相手の大工事だったのです。

朝鮮半島からわたってきた進んだ技術や、鉄の農具、それに、多くの人々の力がまとまりました。

茨田堤は、淀川の洪水から田を守るためにつくられた、日本最初の堤防といわれています。

この堤のおかげで、茨田の地は洪水の被害も少なくなり、お米がたくさんとれるようになりました。

難波の堀江も、おそらくほどの大工事でした。

河内湖にあふれる洪水を、早く海へ流しだすためには、あたらしい人工の川を掘つたのです。

現在、大阪市内を流れる大川が、この堀江だったといわれています。

大王は、川と戦い　水を治めることによって、土地を広げ、人々の暮らしを守り、尊敬をあつめました。

## 水をためて上手に利用した 弘法大師(空海)と満濃池

「弘法大師さまが、おいでになるそうじゃ。  
「うわさだと、あの満濃池をおおしてくださるそ  
うな、ありがたいことじゃ」  
「そりや、ほんとうかい、あの池さえなおれば、  
もう、水にくるしむことはなくなるぞ」  
稲作に生きる人々にとって、水こそ命です。  
毎年のようすに、水不足にならんでいた人々が、  
よろこぶのも、むりはありません。

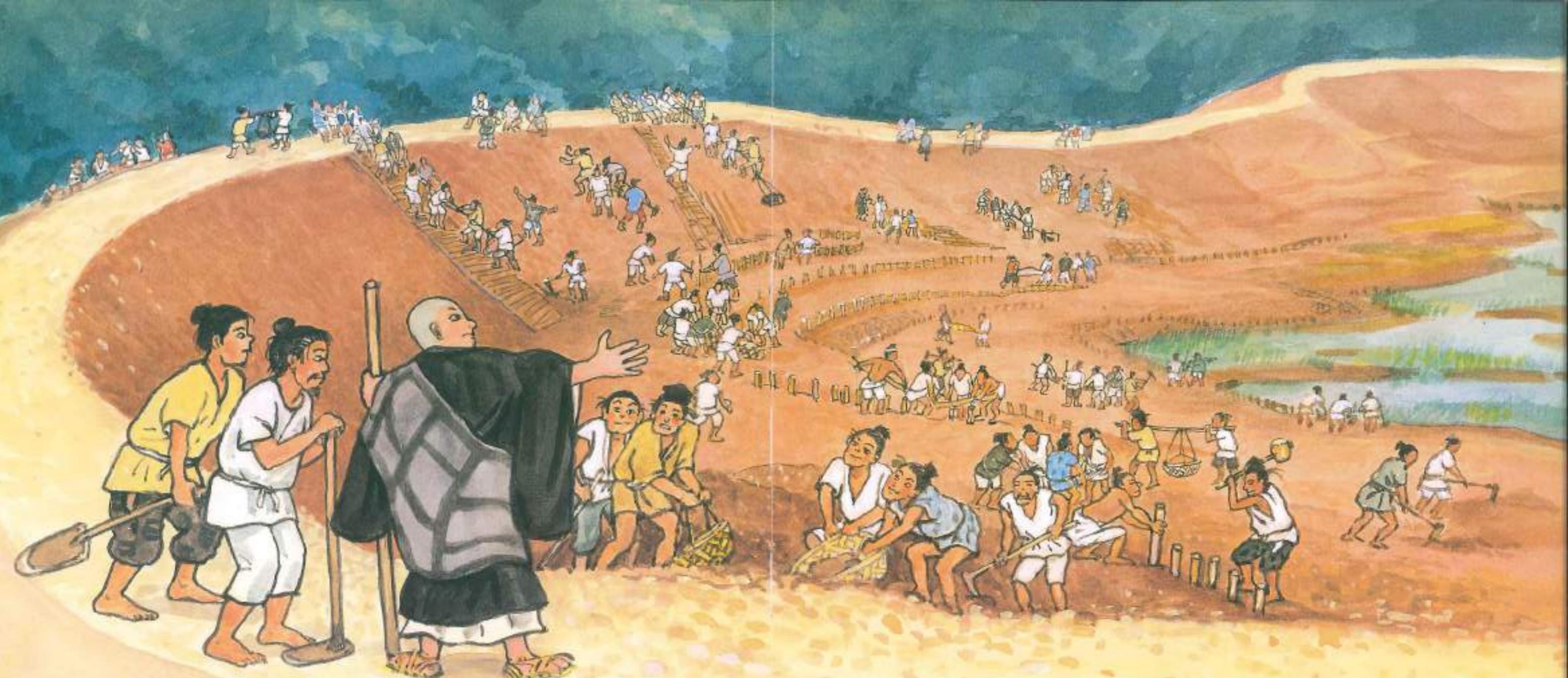
四国の丸亀地方は、もともと雨が少ないうえに  
大きな川もありません。たのみの満濃池は土手が  
やぶれたままで、役に立ちません。  
なおしたくても、満濃池は大きすぎて、土地の人  
々には、なおすことができなかつたのです。  
弘法大師は、平安時代の身分の高い僧侶です。  
若いときに、遣唐使として中国に留学し、仏教の  
勉強とともに、農業や、ため池づくりの技術もま  
なんていました。

大師の指導で、人々は希望にもえて、元気にはた  
らきました。今まで、人々には考えつかなかつ  
たあたらしい方法で、やがて堤は完成しました。  
讃岐山脈から流れる水を、満濃池はしっかりと  
たくわえて、水枯れから水田を守りました。  
あたらしい水田も増えました。

弘法大師の伝説をもつため池や井戸は、全国の  
いたるところにのこっています。

### 僧のはたらきとため池

平安時代の初期は、ため池の時代といわれるほど  
ですが、ため池づくりは、弘法大師だけではありません。  
行基、道慈、空也など、多くの僧たちが、  
農民のために、川に橋をかけたり、ため池をつくつ  
たり、用水路を掘つたりしながら、仏の教えを広  
め、人々の尊敬をあつめました。  
ため池のおかげで、小さな川ぞいても水田を増や  
すことができるようになりました。用水路のおか  
げで、川から少しはなれたところにも、水田をつ  
くることができるようになりました。  
このように、川から水をひいて田畠をうるおすこ  
とを、かんがいといいます。  
かんがいの発達が、農業を広めたのです。



## あばれ川をなだめた 武田信玄

「堤がきれたり、一刻のゆうよもならぬぞ、早く避難いたせいつ」

急をつける早馬が下流の村むらをかけぬけています。

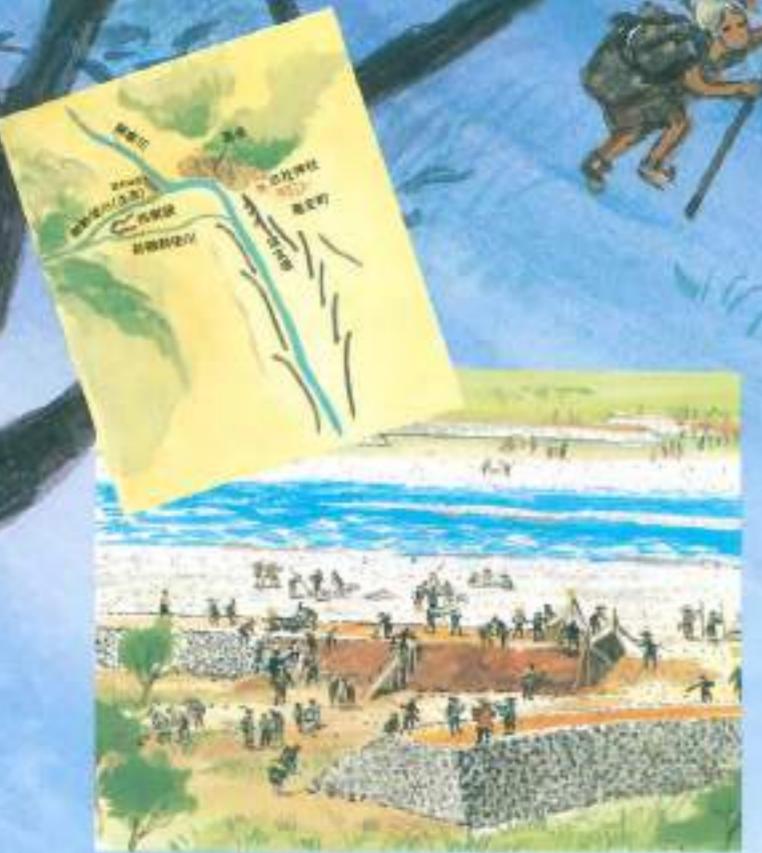
天文十一年（一五四二年）

釜無川と御動使川の合流点でぶつかりあった激流が大洪水となり、甲府盆地をひとみにしました。

このとき 武田信玄は、領主になって一年目。精明と名のる、まだ二十代の若者でした。

しかし、さすが 名将になつた人だけに、深い考え方と実行力をもつていました。

「この甲府盆地ひとつ、水から守れぬようでは、天下の笑いものぞ」  
「しかし、おやかたさま、釜無川、御動使川、それに笛吹川は、いずれおとらぬ あばれ川。今まで何度も 堤をつくりなおしても、やぶられております」



「よいが、みんなのもの、相手を知らずして、戦いには勝てぬ。いずれの川も相手は自然である。自然の力は、はかりしれぬほど大きいのだ。無理におさえこもうとしても勝てる相手ではない。自然には さからわず、川がもつ自然の力を利用することだ」

このような考えから生みだされたのが 露堤です。この堤は、とぎれとぎれに切れている堤防です。洪水の水位が高くなると、切れているところから水は逆流して、一時水が溢ぶようになってしまいます。洪水がおさまるにつれて、その水は 川へ戻るしくみです。

露堤のほかにも、信玄はすぐれた治水の方法をいくつもあみだしています。

激しい御動使川の流れを二つに分ける将棋頭をもうけたり、巨岩をならべたり、駒牛という水制などをつくり、水のいきおいをよわめる工夫もしています。

さらに、自然の頑丈な高岩に流れをぶつけるなどの方法で、露堤の負担を減らしています。

笛吹川には、万力林といわれる水害防備林をつくり、洪水の被害をできるだけ小さくするようにしたり、さらに、堤防の管理を土地の人々にまかせなど、すぐれた治水をして甲府盆地を水の被害からまもつたのです。



## 水争い

人々は、川をおそれながらも、川をうやまいました。川のほとりに水神さまをまつり、いつでも感謝の気持ちを忘れませんでした。

しかし、川は洪水もおこすし、水枯れにもなります。

日曜りがつづくと、村じゅうこぞつて雨乞いの祈りをささげました。しかし折たからといつて、つごうよく雨がふつてくれるわけではありません。

水不足は、日曜り以外の理由でもあります。

新田がつぎつぎとひらかれるごとに、それほど大きな川や用水の水では、まにあわなくなります。

一本の川の水にたよる上流と下流。川をはさんだ対岸どうしの、水の配分をめぐつての争いは、日本各地でおこっています。

農民にとつては水こそ命です。

話しあいでには解決せず、おたがいに武器をもって、血をみる争いに発展することも、しばしばありました。

一五九二年、攝津の国、いまの西宮市の枝川とそこから水をひく北郷用水の水争いは、すさまじく、となり村の加勢まであつめ、やり、弓などの武器までかまえた争いになりました。

ちょうどそのころは、豊臣秀吉の天下で、

「天下、ことごとく、けんかしてはならない」という「おふれ」がだされていたのです。

「おふれ」にしたがわないということは、天下人の秀吉にさからうことでもあつたのです。

それでも、けんかせばにはおれないほど、たがい歴史のひとコマです。

一六〇〇年代、江戸幕府の時代になると、各地の大名たちは、こそつて新田の開発に取り組みはじめます。

新田をひらくには、まず水が必要です。大きな川の水を利用するよう、長い用水路をつけたり、洪水にそなえた堤防をつけたり、日曜りにそなえて、ため池を掘つたりしました。

水がくるようになると、新田が増え、新田が増えたぶんだけ、水不足がおこり、争いになります。

「おらたちが、苦心して掘つた用水の水を、あとからきたものの新田にとられては、おらたちの水田の水がたらなくなる、あとからきたものは、おらたちがつかつたあと、のこり水をつかえ見えました。」

「そんなことをすれば、わしらの新田はせんめつじや、わしらも殿さまのおゆるしをもらつどるんじや、わしらにも用水の水をつかう権利がある」新田が増えれば増えるほど、水をめぐる争いも増えました。



## 利根川の流れを変えた家康と伊奈一族

「殿、こんな値打のない不毛の地に国替えとは、太閤秀吉殿はなにをお考えか、われら、不満でござりまする」

徳川家康の家臣の中には、あたらしく領地となつた関東の荒れ地を見て、なげくものもいたそうです。しかし、家康はちがいました。きちんと川の整理をおこなえば、将来すばらしいところになると見抜いていたといわれています。

関東平野を流れる一番大きな川は、利根川です。流域面積では日本一、長さでは日本で二番目の大きな川で、いまでは千葉県の銚子から太平洋にそそいでいます。

ところが、昔は東京湾に流れでていました。

上流の上越国境に大雨でもふれば、利根川の流れは、たちまち乱れて、田畠をおし流し、江戸までおしよせて水害をおこしてしました。

ですから、関東平野は、じめじめした沼地が多い荒れ地でした。

家康は、江戸城に入るとすぐ、利根川の整理を、間東都代 伊奈備前守忠次に命じました。

これは、かんたんな工事ではありません。

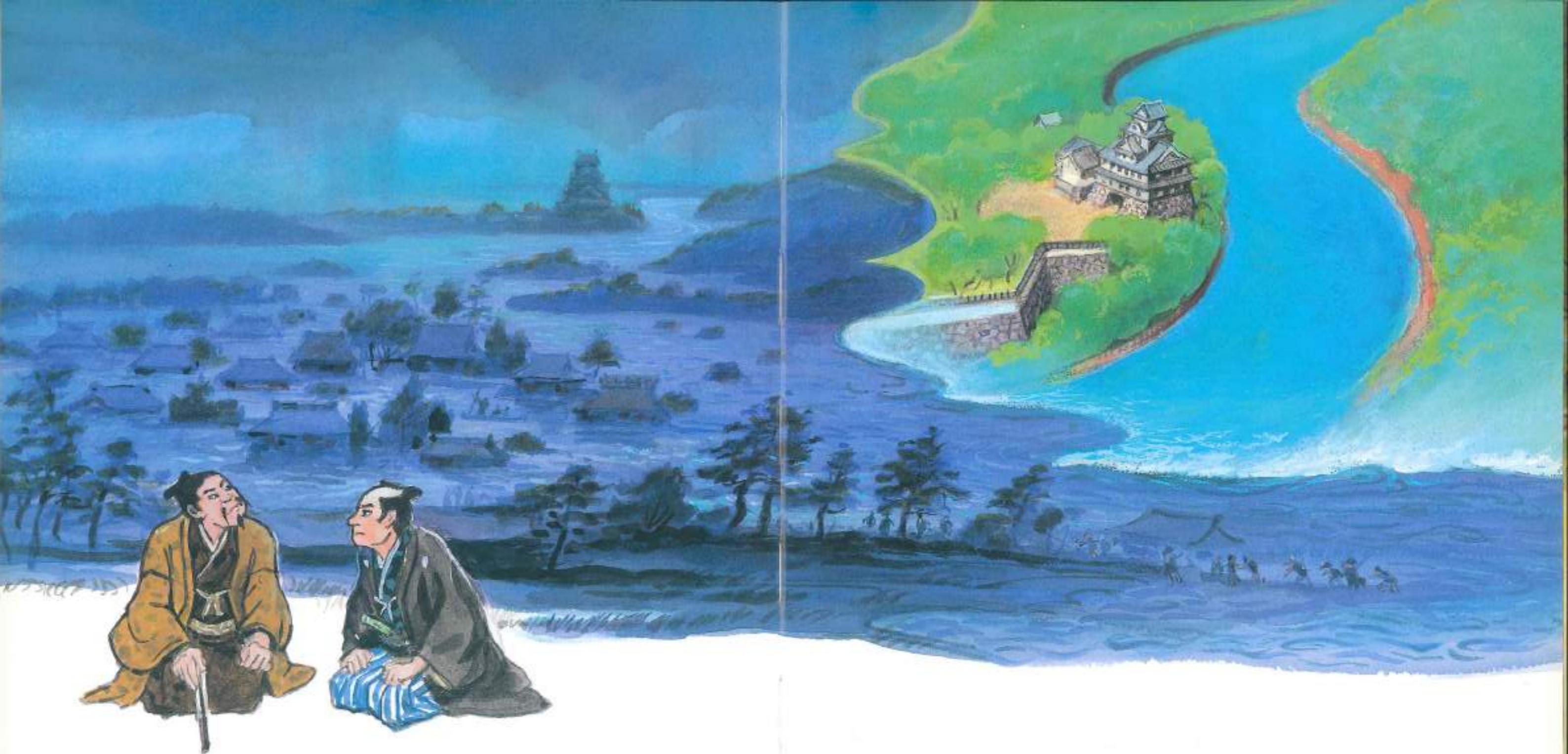
堤は、ひんぱんにおこる規模の洪水をふせぎればよい。たまにおこる大きな洪水は、被害が大きくならないいでに、わざとあふれさせる越流堤などももうけて、湖沼や湿地にたまるようにするのだ。そうすれば、下流の広い水田がつぶされることも減る

このような考へて、葛西用水や見沼澤井がつくられました。おかげで水田が増え、お米がたくさんとれるようになりました。そのうえ、川の道が整理され舟運が便利になって、江戸の町の発展をたすけ、幕府の財政をささえました。

このように、利根川の流れを変える大工事は、伊奈一族の治水は、関東流とよばれ、自然にありますからわいな方法でした。

堤は、ひんぱんにおこる規模の洪水をふせぎればよい。たまにおこる大きな洪水は、被害が大きくならないいでに、わざとあふれさせる越流堤などをもうけて、湖沼や湿地にたまるようにするのだ。そうすれば、下流の広い水田がつぶされることが減る

このような考へて、葛西用水や見沼澤井がつくられました。おかげで水田が増え、お米がたくさんとれるようになりました。そのうえ、川の道が整理され舟運が便利になって、江戸の町の発展をたすけ、幕府の財政をささえました。



大名が武士の要をもとめた江戸時代初期（17世紀）

### 熊沢藩山と百間川

美しい旭川の流れが、岡山城を囲むように流れています。

「どうじゃ、みごとであろう。

天下一の堀をもつ城じゃ」

城主、宇喜多秀家は、満足そうでした。

しかし、これには問題がありました。

じつは、城をさくさい、旭川はむりやりに曲げられていました。

そのため、旭川の自然の流れがこわされて、毎年のように洪水が氾濫し、城下の人々をくるしめるようになつたのです。

それでも、池田光政が岡山の領主になつたころには、人口も増え、城下の町も大きくなつていました。

そんな、承応三年（江戸時代一六五四年）のことでした。旭川に大洪水がおこつたのです。

町や村、水田も流され、多くの人の命までうばわれました。  
日照りつづきで、さんざん苦労したあとでさくさくとだけに、さすがの名医といわれた光政も、「わが生涯で、もつとも大きな災害じや」となげいたそうです。

その光政の家臣に、熊沢藩山という学者がいました。もともと、藩山は、治水には深い考えをもつた人でしたが、城下を洪水の被害から救わねばならぬと「川除けの法（洪水をふせぐ治水方法）」を考えだし、若い武士・津田永忠に教えました。それは、放水路で、百間川と名づけられました。ふつう、放水路は川の流れを二つに分けるためにつくられる人工の川ですが、おもしろいことに百間川は、水の流れていない川で、小さんは作物をつくる田や畑になつていたのです。そして、洪水のときだけ、水が流れこめるようなくみの堤（越流堤）がつけられていました。

津田永忠は、藩山の考案のうえに、自分の工夫もいれて、何度も改良し、何年もかけて百間川を完成させました。

その後、百間川は、岡山城下と下流に広がる新田を守り、岡山藩を発展させました。

## 見沼代用水

「いやあ、ありがたいことじや、見沼代用水がこんな高台にまで利根川の水を運んでくれるなんて、夢みてえだ」

「おどろくでねえか、見沼代用水って川はのう、二二までくるあいだに、大きな川（元荒川）とまじわるところで「伏越」とかいうしかけでな、川の下をくぐりぬけてくるそうじや、そればかりか、横瀬川の上を「掛渡井」という木の橋でわたつてくるそうじや」

見沼代用水がつくられたのは、江戸中期、八代將軍吉宗の時代です。吉宗は、米将軍といわれたほどの人で、新田の開發にたいへん力をそそぎました。

しかし、水がなくては水田はつくれません。しかも、広い武藏の荒れ野に水をくばるには、大きな川から水をひく必要がありました。この役目を受けもつたのが、井沢弥惣兵衛為永という奉行でした。

為永の治水は、紀州流といわれ、長くつよい堤防をさしき、できるだけ洪水をふせぎ、湖沼や湿地をどんどん干拓して土地をつかいややすくするものでした。

当時、武藏の地で最大のため池だった見沼溜井も水が抜かれ、水田になりました。

この見沼溜井に代わる大用水路が見沼代用水で、長さ八十四キロメートル（埼玉県立文書館資料案内より）もの人工の川です。

為永の指導で、土地の農民たちは、夜はちょうどんをもつて測量をつついで、昼は土を掘り、もつこをかついで、汗みどろになつてはたらいて、わずか半年で完成させたそうです。

さらに、用水にそつて、いくつもの沼がつくられ用水から分かれる小さな水路もつづきに掘されました。

荒れはてていた関東平野は、このようにしてひらかれていきました。

このような用水路は、関東平野だけではありません。江戸幕府以外にも、各地の大名や町人が用水路をつくり、新田の開発をおこないました。

このような人々の努力のおかげで、ひらかれた田畠の面積は、江戸初期から百年間で約二倍にも増えたのでした。



木曾三川に命をかけた薩摩藩士の悲劇  
(宝曆治水・一七五四～一七五五)

輪中堤をつくり、水屋をたてても、みだれ流れる木曾三川の治水ができないかぎり、水害はなくなりません。邊尾の農民は、毎年のように大水害にくるしみ、幕府に川の工事をしてほしいと訴えつづけておりました。

しかし、この三つの大河の治水工事は、当時としては予想もつかないほどの大工事でした。

工事場所は、延長六十キロメートル、巾二十キロメートルもある広い区域です。

幕府は、この難工事を薩摩藩に、おてつだい普請という名目で、命じたのです。

技術がむずかしいだけでなく、資金もたくさん必要です。この仕事にかかるれば、薩摩藩がどれほど大きな痛手をこうむるか、幕府はわかつていました。

幕府には、七十七万石の薩摩藩の力をよわめる目的もあったということです。

幕府の考えたどおり、薩摩藩は血みどろになつて

川と戦うはめになりました。

薩摩の農民は、自分たちとはまったく関係のない遠い土地の人々のために、かゆもすれないほどの税をとられてもがまんしました。

はるばる邊尾の地にてむいた一千名の薩摩藩士たちは刀をすきやくわにもちかえて、なれない仕事にたえて、歯をくいしばつてはたらきました。やつときずいた堤防が、激しい水に流しつぶされることもありました。

くるしみにたえ、苦労をかさね、それでも一年あまりの期間で、延長百二十キロメートル、百九十九村にまたがる難工事をやりとげたのです。

そして、この工事は薩摩藩の二年分の総収入をこえる資金をついやりました。

すべての仕事がおわるまで、どうどうと指揮をとつてきた総奉行の平田鶴魚は、藩に多くのお金をつかわせたことや藩士を死なせた責任をとつて、一番さいごに切腹したのでした。

木曾川下流の油島締切り堤に藩士たちがうえた千本の松は、いまでは、りっぱな松並木に成長し、千本松原といわれる名所になっています。



## 川によって栄えた商人の町、大阪

川のめぐみをうけて発展したのは、農業ばかりではありません。

用水路の発達は舟運の発達にもつながります。

將軍のおひざもと 江戸の町は、武士や商人たちがあつまり、人口百万人をこすにぎやかな町になりました。

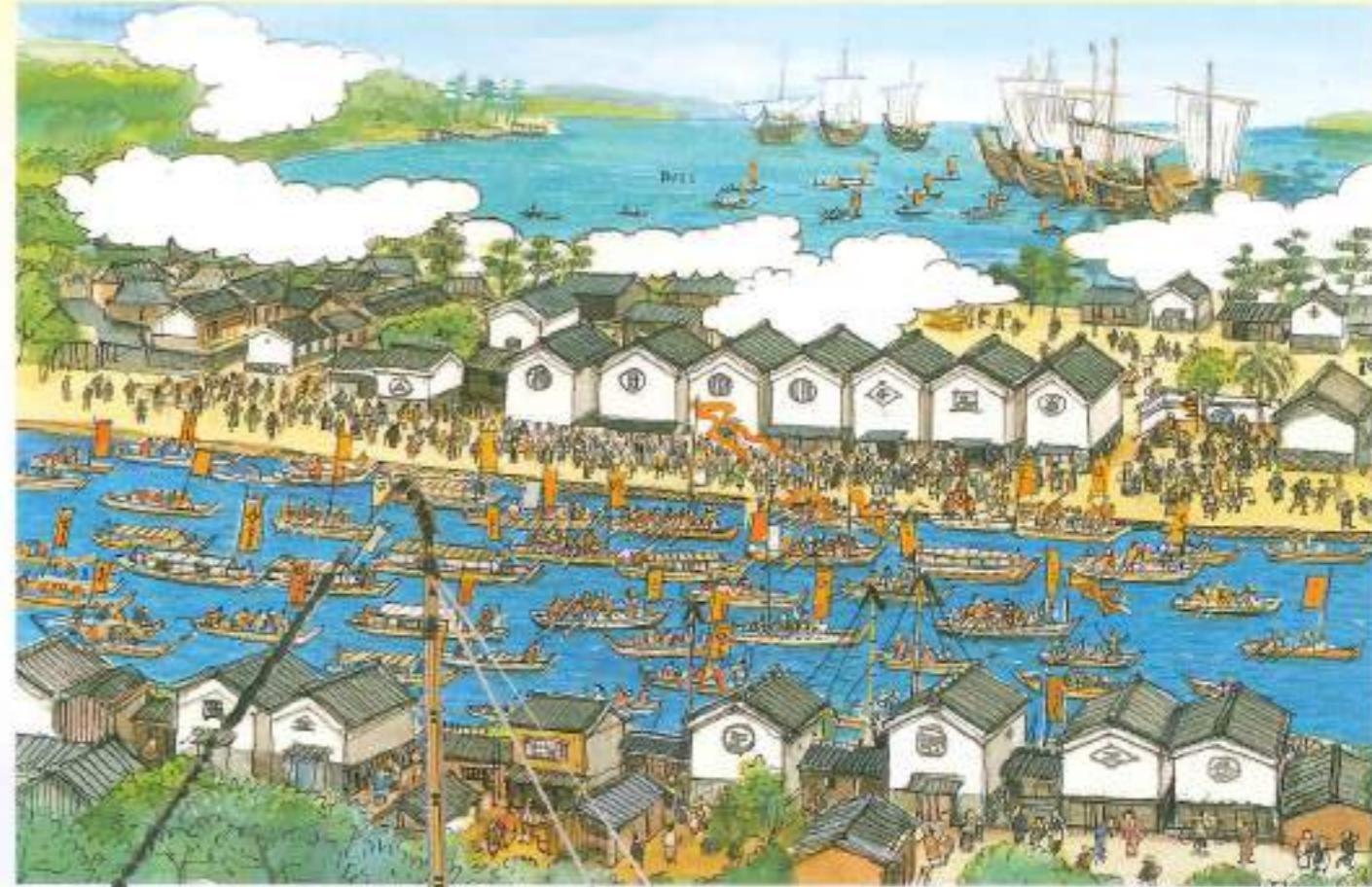
一方、大阪の町は、人口こそ江戸にはかないませんが、天下の台所とよばれるほどの商人の町として栄えました。

大阪の町には淀川が流れていますが、当時の河口

には、かぞえきれないほどの水路がはりめぐらされておりました。

全国各地から、米をはじめ、いろいろな物資が、水路をとおってあつめられ、商人の手で商いされ、江戸や各地におくられていきました。

運河ぞいに倉がたちならび、出船千艘入船千艘がひしめくにぎわいをみせ、その商いの大きさは、「天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨七分は舟中にあり」ともいわれました。



## 越後平野と洪水

新潟県の越後平野は、大昔から、信濃川が何度も洪水をおこし、そのたびに運はれてきた土砂が、広い入江をうめたててきた土地です。江戸時代では、まだ、芦がしげる沼地や湿地が広がっていました。

水田は泥深く、腰まで水につかる農作業は、「舟農業」とよばれています。

ですから、水にはつよいが、ますいお米しかつくることができませんでした。「とりまたぎ米」といつて、あんまりますいので、鳥までまたいていくといわれたほどです。

それでも人々は、つらい農作業にたえて、いつもようけんめいはたらきました。

そんな人々を、洪水がおそうのです。

信濃川は日本一長い川です。水量が多いことでも日本一です。しかも、雪国を流れるこの川の雪解け洪水や、大雨による洪水は、越後の大平野を水びたしにするほどすさまじいものでした。

当時、この地に住んでいた良寛和尚が、文化元年（一八一四）の水害のようすを詠んだ漢詩が、のこされています。

「六月五日をすぎてから天候が荒れだして黒い雲がひくひくたれて晴れまもなかつた。雷が夜どおりとどろいて、暴風が日がな吹きまくつた。大水が

てて家の上までつかり、大雨は田畠をうめてさかいいめも見えない。村の子らの姿もなく、音もせず、旅へてた馬も車ももどつてこない。川水はどうとうと流れ、岸のさかいはどこにもなく、百姓らは子供も大人も、毎日の仕事で疲れててている。田畠はいつたいどこなのか、堤防も破れている。女性の人も織り仕事どころではなく、農夫たちは鉢を手にしてなげき泣くばかりだ。村のお宮には供物をささげ、神という神には祈りつくしてはるなのに、天はそれにこたえてくれない。この世に神があるなどうたがいたいほどだ。だれが、いつたい、この農民のふかいなげきをおさめてくれるのだろうか。外へたついでに里人の話を聞くともなく聞いてみると、ことしは作物のできがよくて、いつもの倍ほどはたらいた。気温もよく、ふかく土をたがやし、雜草をぬいて、朝夕世話をつづけたのだ。それなのに、にわかなるこの暴風雨は何と、根こそぎ作物を流し去つた。これをおげかないでおられようか」（水上勉訳）

このような水害は、三年か四年に一度はおきていました。土地の人々の力だけでは、この日本一の水害をもつ川を治めることは、とてもできませんではありません。

当時の幕府の力でもうすることもできませんでした。人々はそれでもあきらめず、親から子へとうけつぎながら、百八十年もの間、信濃川に放水路（大河津分水路）をつくってほしい、と國に訴えつけたのです。



## 日本の近代化とお雇い外国人

黒船が浦賀にやつてきたのが一八五三年。明治新政府ができたのが一八六八年(明治元年)。蒸気機関車が走りはじめたのが、明治五年。文明開化の波がおしよせ、日本の國は近代化への道を走りはじめました。

さて、このような大変革のなかで、人々と川とのかかわりも変わりはじめます。

いままで、地域の大名や農民、商人などによって進められてきた治水と開発が、國の方針によつておこなわれるようになりました。新政府は、進んだ西洋の文化や近代技術を積極的に取り入れることからはじめました。外國のすぐれた技術者を、高い給料をはらつて何人もまねきました。

それが、お雇い外国人といわれる人たちで、川の工事の専門家もたくさんやつてきました。なかでも、オランダからきたファン・ドールンとヨハネス・テレーヶは、二二〇から日本を愛し、河川技術の指導にあたりました。

ドールンの仕事のなかでも、東北の猪苗代湖から水をひく安積疏水の事業は有名です。



ファン・ドールン



ヨハネス・テレーヶ



十六橋



オランダ堤堰

このおかげで、すばらしい新田が、安積・岩瀬二郡の地に広がつたのです。明治の国土開発はドールンによつてはじまりました、とさえいわれています。

ヨハネス・テレーヶは、三十一歳から六十歳まで、技術者としての一生を、日本の川と日本人の技術者の養成につくしました。

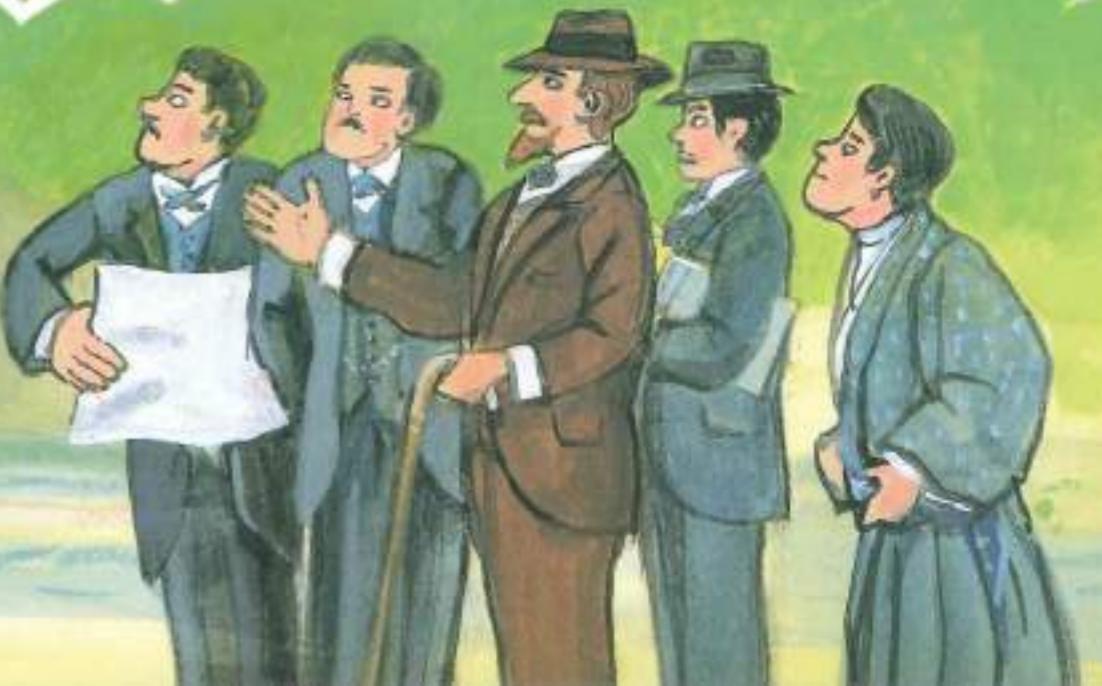
テレーヶは、大水害の調査でおとずれた常願寺川を見て、「これは川ではない、竜だ」といつたそうですが、日本の川の特徴をよくあらわした言葉として伝えられています。

このように日本の川を知りつくし、川をいち部分で見ることなく、上流から下流まで一貫してとらえ、上流の山や森林をだいじに考え、山を守る治山にも力をそぎました。

このようす、すぐれた外国の指導者にめぐまれて、日本の河川工事の近代化の基礎は、きずかれていたのです。



文明開化の象徴 美術館



## ひらだ船の悲哀

「ふんつ、いくら、すごか機械か、知らんがのわしらが石炭、運ばんじやつたら動かんぱい」遠賀川を行き来する、ひらだ船の船頭さんは、おいぱりで胸をはりました。

九州の福岡県、筑豊炭田から運びだされる石炭は、明治の近代工業をささえるエネルギー源でした。

工場では、外國から輸入された機械が、ガタンゴトンと動いています。川の工事場でも、エキスカベーターなどという土を掘る機械が登場し、人力の何倍もの力はたらきをしました。

掘りおこされた土は、トロッコにつまれ、蒸気機関車がひっぱりました。

それら近代機械のエネルギーは、石炭の火力。筑豊の石炭はどんどん掘られました。

石炭を運ぶひらだ船は、おおいそがします。いくら運んでも、運びきれないくらいでした。

もつとも多いころには七千艘をこえるひらだ船が遠賀川せましと行き交ったそうです。

「色は黒いが、川筋そだち  
ケンカ早いが、情にはもろい」

仕事はきついけれど、収入がよくて、氣つぶもない、男らしい川筋気質がもてはやされ、船頭さんは、若い川筋の男たちのあこがれのまとでした。ところが、明治二十四年に鉄道・筑豊線が開通すると、事情が変わりました。

「岡蒸氣(汽車)がなんじやい、わしらが運ぶ石炭で動いちょる」

と、自信満々だったひらだ船の舟運にかけりが見えはじめたのです。

ひらだ船が運んだ石炭で動いた汽車が、ひらだ船に替って、石炭を運びはじめたのでした。

遠賀川をぎわした、さしものひらだ船団の勇ましいすがたも、ときの流れに消えていきました。



## 水の力で走った最初の電車

日本で最初の市内電車が、京都の町なかを、ゴットン、ゴットンと元気よく走りだしたのは、明治二十八年のことでした。

「なんば東京、東京というたかて、やつぱり、京都は都どす」

京都の人々は、胸をはってよろこびました。電車に電力をおくつたのは、京都城上の二千馬力、水力発電所で、この動力源は人工の川で運ばれた琵琶湖の水でした。

【琵琶湖疏水】この人工の川の名前です。

長さ十一・三キロメートル、この水路の水は、大津からトンネルをぬけ、山科盆地の田畠をうるおします。さらに、第二、第三のトンネルをぬけ、蹴上発電所で電気をおこし、りっぱな石づくりの水路橋をわたつて鴨川に流れます。

当時としては、画期的な大工事で、国家予算の一・八パーセントがついやされたほどです。

ところが、おどろいたことに、この琵琶湖疏水の立案・計画・設計をして、工事の最高責任者になったのは、田辺朔郎という、まだ大学を卒業して二年目の青年でした。

しかも、琵琶湖疏水の大計画は、後の大学卒業論文だったのです。

トンネルの長さだけでも二四三六メートル、現在のような機械力はもちろん、電気さえなくカンテラがたよりの難工事でした。陸上に建設された、大規模な公共用発電所も日本最初のものでした。

一本の水路の水が、水運、かんがい、発電と、いくつにも利用されたのです。

この計画と業績は、外国からも高く評価され、イギリスの土木学会から、名誉あるテルフォード賞がおくられました。

この受賞は、都が東京にうつり、気落ちしていた京都の人々のよろこびだけでなく、日本の国としても誇らしいことでした。



## 信濃川の大河津分水

「バンザイ、バンザイ」

職員のなかから期せずしておこった歓声に、黒山の群衆が和した。

ここは北越信濃川

流れも速き分水の

末はいづくぞ寺泊

泣きあふれるように歌声があがつた。

歌声にむせび泣きがはじまつた。……

水と開い、寒さと開い、暑さとも開い、四星霜を

一つの目標にむかつて、心と力をあわせてきた男たち。……

つきあける感動にむせて、男たちの歌声はとぎれがちであった。……

（『分水路／信濃川に挑んだ人々』田村喜子著より抜粋）

水害になやまされつづけてきた越後平野の農民の悲願がかない、信濃川に長さ約十キロメートルの大河津分水路が完成したのは、昭和六年（一九三一）のことでした。

明治四十二年（一九〇九）の着工から、この日までの二十二年間は、けつして楽な日々ではありませんでした。

外國から取りよせた進んだ機械や機関車がもちこまれました。それに日本のすぐれた技術者たちは「人類のため、国のために」という信念と誇りにもえて、この大事業に取り組みました。

しかし、工事は困難をきわめました。

掘つても掘つてもくずれる「ばけもの工事場」やつくつたばかりの自在堰が、激流におちこんでくずれるなど、大きな事故もおこりました。

のべ一千万名もの人々が、くるしい作業にたえてはたらき、八十四名ものとおとい犠牲者までだす難工事だったのです。

冒頭の文は、自在堰を可動堰につくりかえ、分水路が完成したときの感動的なようです。

江戸時代から、人々が幕府や政府に訴えつづけて、この日まで、なんと二百年間もまちわびた悲願がみのつたのです。

あつまつた越後の人々や、工事にたずさわった人の、はかりしれないほどのよろこびが伝わってきます。

現在、信濃川には大河津分水のほか、閑屋分水などいくつもの分水路がつくられています。

こうした分水路のおかげで、舟農業といわれ、まじい米しかつくれなかつた越後平野は、みごとにすがたを空えはじめました。

おいしい米づくりにはげみ、越後平野を日本の代表的な米の産地にしたのです。しかも、おいしきでも、横綱格にまですることができたのでした。



## 大ダムと水道と人々

明治、大正、昭和と近代化が進み、工場も増え、町も大きくなりました。

どこの工場でもたくさんの水がつかわれます。電車や鉱山や工場では、大量に電気がつかわれます。

家庭にも水道がひかれ、電灯がつきました。水力発電を目的にした専用の大きなダムも、つぎつぎとつくられました。

大正十三年には木曽川に、水力発電専用の大ダム、大井ダムがつくられています。

昭和時代になると、水をつかう用途も、つかう量も、ぐんと増えました。

だからといって、そのぶん 川の水がつづくよう、増えるわけではありません。

川をせきとめ ダムをつくり、水をたくさんえておいて、いつでも利用できるようになります。

それを水資源の開発といいます。

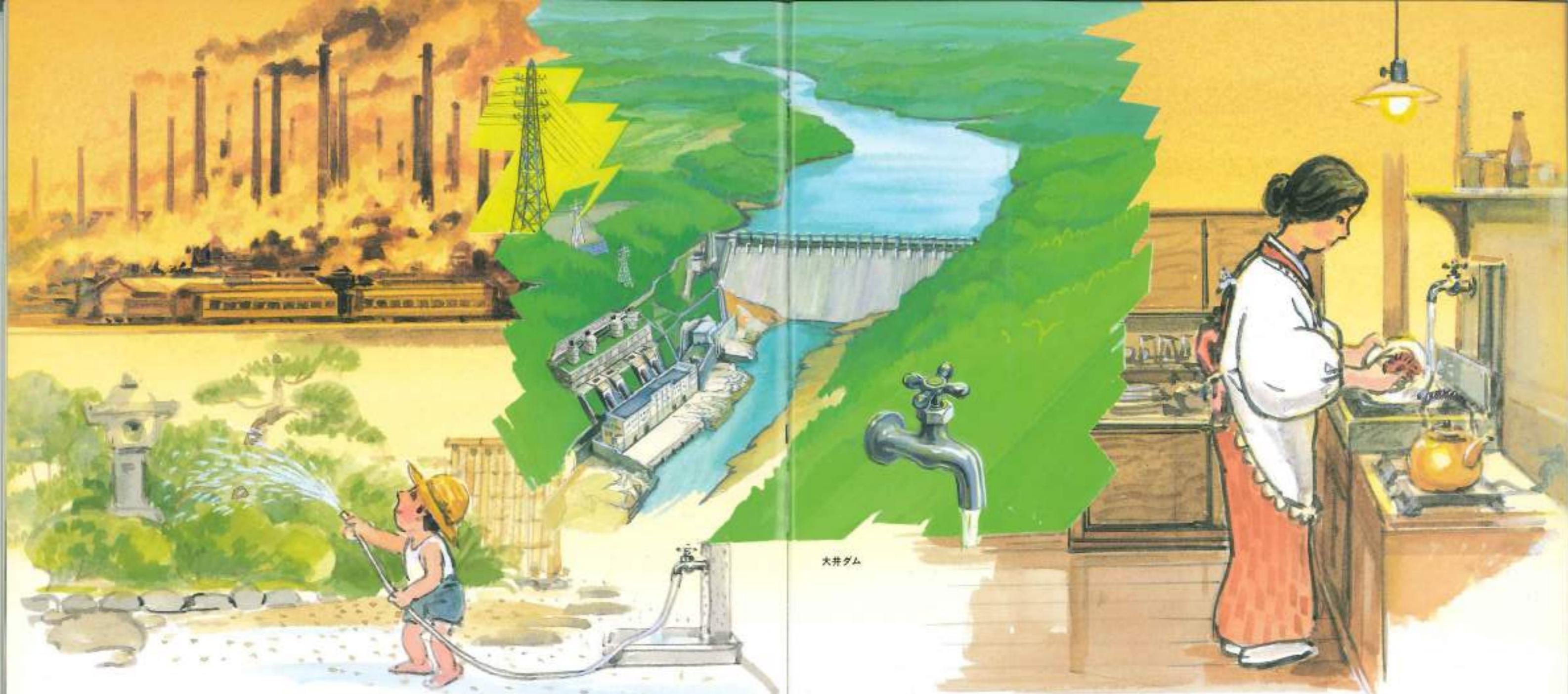
時代がうつり変わるにつれ、水資源の開発は活発に進められるようになりました。

ダムもいろいろな目的をもつようになります。

農業用の水、発電用の水、工業用の水、町の人々がつかう水道の水（生活用水）などをためるだけでなく、洪水を調節する目的もでできます。

このような二つ以上の目的をもったダムを、多目的ダムといいますが、現在では、多目的ダムが

大井ダム



### 主流になっています。

その多目的ダムは、あちらの川にも、こちらの川にもつくられました。一本の川にいくつもつくられたところもあります。

ダムのおかげで、町の人々は、水道の蛇口をひねればいつでも、きれいな水をつかうことができるようになりました。しかもたっぷりつかうことができます。水道さえあれば、身近に川や井戸がなくても、くらせるようになります。

水道の水は川からもらっている ということさえ忘れた人々は、川のことなど おかまいなしに水をつかうようになつてきました。

人々の川への関心が うすれはじめたのです。

川をうやまい、おそれ、水神さまをまつり、川への感謝の気持ちをけつして忘れなかつた人たちは、どこへいってしまったのでしょうか。

日照りには、天をおおいで雨乞いの祈りをささげ、水田の水を守るために血を流す争いました人たち。

長雨がつづけば、堤にかけつけ、堤を守ろうと、必死になつて土のうをつんだ人たち。

ひとときも川を忘れず、川とともにくらし、川を育ててきた、地域の人にはおかまいなしに、都市は広がつていきました。

おかげで明治、大正、昭和と大きな戦争がおこり、人々のこころはますます 川からはなれていきました。

戦災と風水害に、うちのめされた人々

昭和二十年八月十五日は、日本の敗戦の日です。

つぎと台風災害がおそってきました。

「原爆が落とされて、ひと月あまり。まだ死の地獄のなかにいるというのに、こんどは天災におよばれるなんて、この世には神も仏もあるものか？」

広島の人たちは、もう涙もないありさまでした。  
焼けただれたガレキの原をすさまじい風雨がふきあ  
れ、広島県だけで二千十二名もの犠牲者をだ  
たのです。昭和二十年九月十七日（一九四五）、

九州に上陸した枕崎台風でした。

さらに同年十月には、阿久根台風がやってきて

昭和二十二年には、超大型のカスリン台風が大雨をふらせ、利根川の堤防がやぶれて、埼玉から東

京に大水害をひきおこしました。  
まだまた災害はつづきます。

毎年、毎年、たくさんの犠牲者がいました。昭和三十三年の狩野川台風は千百九十六名の犠牲者

者を、昭和二十四年には、伊勢湾台風が四千九百八十七名もの犠牲者をだす、大惨事となりました。

卷之三

ほどの大灾害の連続だったのです。

のひとつに、治山、治水のおくれがあげられて、います。

にかりだされ、山や川のめんどうを見る人手が増りました。

大きなお金かかる川の整備は一毛一厘も資金をもりません。

えました。  
はげ山では、ふつた雨を土にとどめることはでき  
ません。

川でも、堤防のよわつた箇所があつても、なおすになおせないありさまでした。

い、川をなだめ、山には木をうて、水を貯て、土地を守つてきたのです。

近代国家をつくろうとした、明治の人々も、土地を守り、暮らしを守るため、まず 川づくりかこはこのたのです。

戦後の国土の復興も、川を治め、水資源をどのように育て、利用するかに、かかってきました。

国でも、さつそく治山治水にかんする法を制定し、五ヵ年計画など、本格的な河川事業に取り組みはじめたのでした。



### 天敵の主要な水害

水害名	発生年月	概要		被災地図	水害名	概要		被災地図
		死者 死因不明 者数	被災家 庭数			死者 死因不明 者数	被災家 庭数	
カスリン台風	昭和5年7月	4人	5戸	関東、東北、中西日本 近畿、関東、中西日本	伊勢湾台風	34.5	4,587	15
アイオーン台風	昭和5年7月	98人	75	中西日本	伊勢湾台風	35.6	467	45
ナニト台風	昭和5年8月	154	22	関東	第2寅芦台風	36.9	155	45
ジエーン台風	昭和5年8月	126	42	関東、四国、九州(特に九州)	7月豪雨	37.7	142	13
ルータン台風	昭和5年10月	1,043	53	父	昭和6年台風	38.9	52	10
12号台風	昭和6年1月	344	91	四国、西南、中南、北陸	34~35号台風	39.3	118	47
西日本台風	昭和6年1月	1,062	61	九州、四国、中国	四日連続雨	42.8	374	45
南高水害	昭和6年7月	1,209	21	南・西・諸島	梅雨前線雨	47.7	417	32
強半水害	昭和6年12月	967	12	九州、中国、西日本	冬季台風	48.4	142	33
丹那台风	昭和7年3月	1,196	71	沖縄・奄美	3~5号台風	50.3	145	11

## 高度成長と川のなげき

「わたしは川よ、じつは、わたし おこつて いるの。  
わたしの 言い分も、聞いて ちようだい。  
母なる川 といふことばがあるで しよう。」

昔の人は、川を母とよんで、それは大切にしてくれたわ。自分たち 人間がくらして いるのは川のおかげだ、川あればこそだ、とわたしを尊敬してくれていたの。

それが、ちつとも そうでなくなつたのよ。  
そうね、一九五〇年代の後半からのことよ。

日本の国が 高度経済成長の時代になつてからだわ。

街はどんどん大きくふくらみ、これまでにない産業が増え、工場もどんどん増える。

大きなダムもどんどんつくられる。

ダムには、たっぷり水をためろつて いうから、わたし いっぱい水をためたわよ。

そうしたら こんどは、水をよこせ、水をよこせつて……。

わたしが、やせほそるほど 水をとつていく。  
あなたたち人間は、すいぶん勝手だとおもつたけど、あなたたちのためならと我慢したわ。

でも、このあとが もつといけないのよ。  
わたしがあげた きれいな水を、よくも まあ

あんなによこすわね。そのよこした水を……よ  
これたまま、わたしにかえすんだからつ。

おかげで、さらさらで きらきらとかがやいて  
いたわたしは、どころで まづくろけ、

見るかげもなくなつたわよ。

それでいて あなたたち、なんていつとおもう。  
きたねえ川だなあ、おまけにくせえや、見ただけ吐き気がするよ……だつて。

そのうえ、ポイッとゴミをすてていつたのよ。  
ああ、頭にくるつ……。

わたしはね、あなたたちの発展をねがつて、  
いつしょうけんめい はたらいてきました。

そのわたしを こんなめにあわせたのは、  
あなたたち人間で しよう。それなのに、

どうして あなたたちに きらわれなければな  
らないのよ……」

母なる川は、おこりながら泣いていました。

一九五〇年代後半、といえば昭和三十年代です。  
日本の国の経済が、世界じゅうがおどろくほど成

長したころです。しかし、経済成長したかわりに、  
大気汚染、騒音などの公害問題がおこりました。

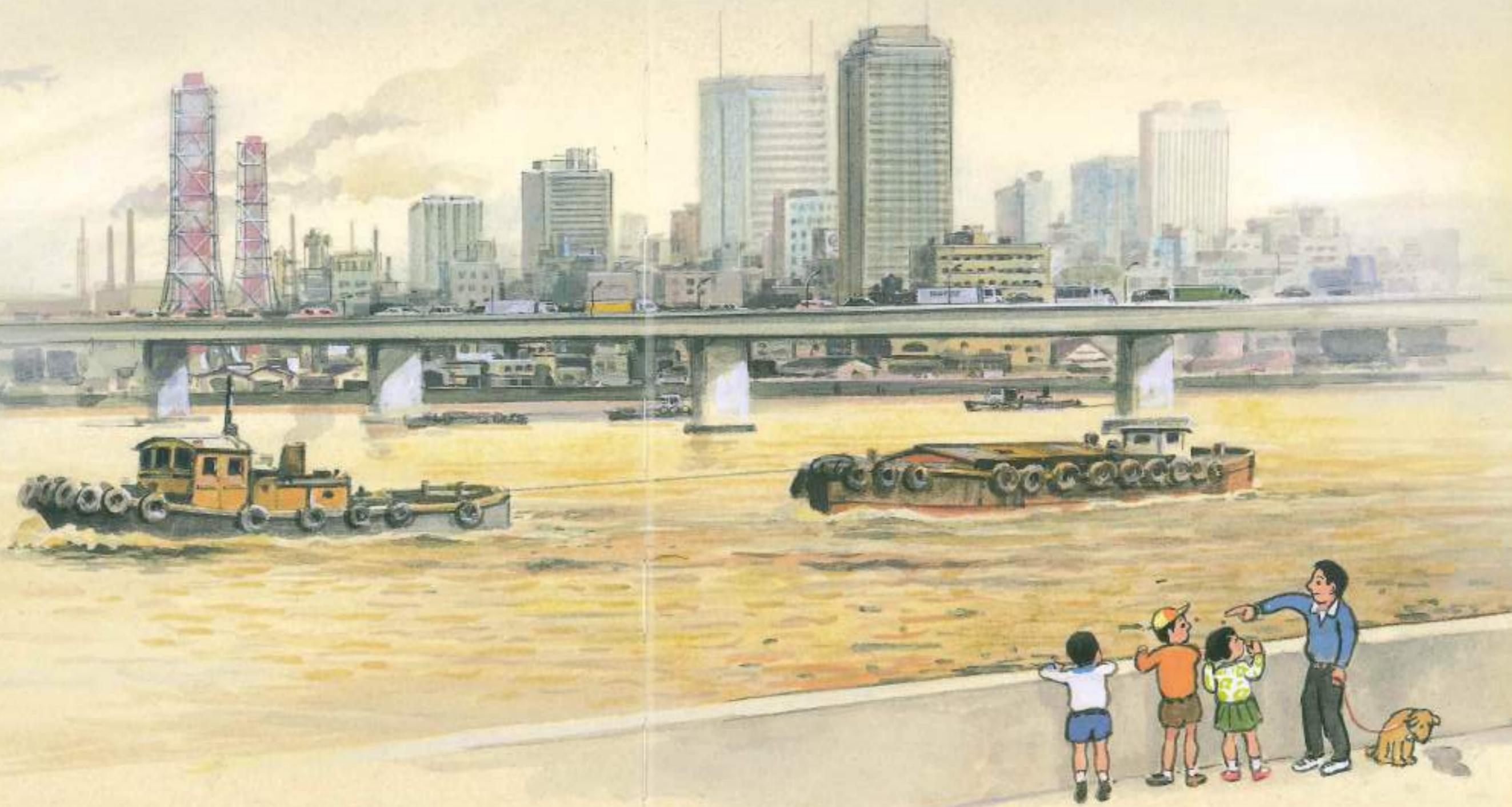
川では、工場排水のたれ流しなどによって、水質の汚濁が進み、魚がすめないばかりか、ひどい悪臭をはなつところさえて てきたのです。

人々は、自分たちのつごうだけで、川を利用するだけ利用しておいて、川をよごし、そのうえ、よこれた川をきらいました。

川にとつて、こんなにつらいことはありません。  
おこるのは、あたりまえです。

「このままで 川が死んでしまって」  
と、あわてて 叫びはじめる人たちもできました。  
水質汚濁防止法ができて、工場排水のたれ流しの規制が始まったのは昭和四十二年のことでした。

川の水をきれいにしようと 河川浄化事業もはじめました。



## しづん 自然も人もよろこぶ川づくり

一九六〇年代のおわりころ、気がついたら日本は、経済大国と呼ばれるようになっていました。人々の暮らしは便利になりましたが、川に対する関心はうすれ、川はますますよこれました。

「これはやつぱりおかしいぞ。これでは、まわりの環境がわるくなるばかりだ。昔は、ゆたかな自然が、もつといっぱいあつたはずだ」「ほんとうのゆたかさは、便利さだけではない。物がいくらあつてもだめだ」

「ほんとうのゆたかさには、心のやすらぎが必要なんだ」

人々は気づきはじめました。

もう、以前のように、

「川は、水道の水になれば、それでいいのだ。つかつたあとによこれた水は、ゴミといっしょに、早く海にでていけばよい」

と考える人はいません。

川を管理するお役所でも、以前は、水害から人の命と財産を守ること(治水)と、海水のときも水にこまらないため(利水)の仕事におわれどおしました。

もちろん、洪水や湯水の被害を減らす仕事はだいじです。しかし、それだけでは川は守れません。環境をしっかりと守らないと川は死ぬ、と考え、治水・利水・環境の三つを川を守る仕事の柱にして、真剣に取り組みはじめたのです。

「人間のことだけを考えしていても環境はよくならない。魚や鳥、昆虫、草花など、自然の生き物たちのことも忘れてはならない」

「どの魚も、すきなところへいけるようにしよう」「セキの魚道もひとつではだめだ。階段式にぴょんぴょんのぼれる魚道。小さな魚やカニたちが自由にのぼりおりできるように玉石をしきつめた玉石魚道など、それぞれの川にすむ魚にあつた魚道をつけよう」

「堤防もじょうぶでなければならぬが、コンクリートむきだしでは自然がこわれる。基礎のコンクリートのうえに、たっぷり土をもつて草花もうえよう」

「野草ひろばやワンドも増やそう」「流域ぐるみの環境を考え、水とみどりのネットワークを町じゅうに広げよう」

このように、現在では、治水や利水の仕事は、同時に、環境を考えながら進められています。



## 歴史編のまとめ

川と人々のくらしの歴史、いかがでしたか。歴史をたどってみると、

大昔から、いつ、どんな時代でも、人々は、川のめぐみをうけつづけるために、

川がおこす自然のおそろしい力（洪水）と戦いながら、川を治め、土地をひらいてきたことが、わかりいただけたとおもいます。

私たちは、川がつくった平野に住み、川から水をもらい、川の流れをつかわせてもらい、水のないところへは用水路をひきました。

土地をひらくためには、川のつけ替えをしたり、分水路をつくったりもしました。

日照りのときも水をつかえるよう」と、ため池を掘つたり、大きなダムまでつくりました。

水害を少なくするために堤防をきずき、遊水地をつくるなどして、自分たちのくらしを守ってきた

のです。

現在、自然にできたままの「ついている川なんて、日本じゅうどこに也没有ん。

どの川も、どこの川も、人々の知恵と血のにじむような努力で治め、育ててきた川なのです。

そして、たつたいま、川の管理にたさわる人たちが、いつしょうけんめい、川と取り組みはたらいています。

ところが、わたしたちのまわりでは、川への関心はうすれています。

水道の蛇口をひねれば、ジャーツと水がでてきますね。

その水が「どこからきた水なのか、考えたことはありますか？」

遠い山の森からわきだした水が川になり、川からひきこまれた水は、浄化され水道管をとおり、網の目のように、村にも町にも広がっています。

私たちは、この網の目のような川の流れのなかに住んでいるのです。だからこそ、いつでも、すきなときに水をつかうことができるのです。

そして、わたしがつかってよこした水は、淨化されてまた川へもどっています。

つまり、川の水は、私たちのくらしのすみずみまで流れ、私たちのくらしを生きているのです。そんな大切な川のことを、ときにはおもいだしてください。

